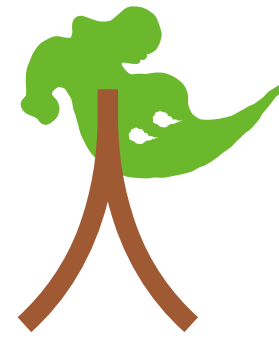


# COC-C-NBU 2014-2019

日本文理大学COC事業  
おおいた、つくりびと  
MEMORIAL BOOK





# WHAT'S

## “おおいた、つくりびと”

豊かな自然と歴史や文化を  
大切に守り続ける素晴らしい大分県が、  
私たちのキャンパスです。

### NBU日本文理大学が取り組むCOC事業

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」。

私たちは、このプロジェクトを“おおいた、つくりびと”と名付けました。

お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか？

日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めました。

そのステージは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、私たちでしかできないことにチャレンジしました。

地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。

私たちは大分県の未来を拓く“おおいた、つくりびと”になりたい。

そんな想いを胸に、地域を学びのフィールドにした活動は今も続いています。

## “おおいた、つくりびと”が取り組む PROJECT

### 地域課題プロジェクト

# 7+1の視点

地域課題に対して「7+1の視点」を持ち、大学で学んだ知識・技術を活用する。

地域における「プロジェクト」として、地域・行政・企業・NPOの方々と共に“おおいた、つくりびと”として活動を展開。

実践から得られた経験をもとに、知見を広げ、学習を深めることで、次のステップへと進んでいきました。



1 POINT OF VIEW

小規模・高齢化が  
深刻な集落における  
コミュニティの維持・活性化



2 POINT OF VIEW

人口減少社会を  
支えるための  
先進的な“ものづくり”



3 POINT OF VIEW

自然の積極的な  
活用による保全と  
地域活性化



5 POINT OF VIEW

健康増進及び  
生活支援による  
コミュニティの維持



4 POINT OF VIEW

商店街の活性化  
による地域振興



6 POINT OF VIEW

NPO法人の  
活動・経営支援



7 POINT OF VIEW

地域ブランドの発掘  
による交流人口の増加・  
産業の活性化(6次化)



L POINT OF VIEW

“おおいた、つくりびと”  
育成のための  
地域志向科目・正課外活動



“おおいた、つくりびと”が取り組んだ

## 3FIELDS

3つの分野

教育 × 体感

地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見。専門的なスキルを活用して住民や関係者とともに、地域の課題解決に取り組むことができる人材を育成するために必要な力をつける学修サイクルの確立を目指しました。

研究 × 感動

地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元するための、分野を超えたプロジェクトチームを形成。地域の課題解決につなげました。

社会貢献 × 感謝

県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えるとともに、行政と連携した講座等を開講し、地域再生・活性化を推進しました。

## HISTORY

- 2014 ● 大学COC事業採択
- チャレンジOITA 人材育成フォーラム2014
- 2015 ● チャレンジOITA 地域創生活動報告会2015
- COC事業共同記者会見 (大分県立看護科学大学と共同開催)
- 佐賀関地区学生活動拠点開設
- 2016 ● 第1回 成果報告&合同シンポジウム (大分県立看護科学大学と共同開催)
- チャレンジOITA 地域創生活動報告会2016
- 豊後大野市学生活動拠点開設
- 木佐上地区学生活動拠点開設
- 九州・沖縄COC インカレキャンプ in 湯布院
- 2017 ● 第2回 成果報告&合同シンポジウム (大分県立看護科学大学と共同開催)
- チャレンジOITA 地域創生活動報告会2017
- NBU日本文理大学 創立50周年記念式典 COC事業活動報告
- 地域創生特集 発刊 (日本文理大学紀要)
- 2018 ● チャレンジOITA 地域創生活動報告会2018
- 2019 ● チャレンジOITA 地域創生活動報告会2019

—— おおいた、つくりびと ——  
**PROJECT**

“おおいた”を学びのフィールドに  
地域とつながり、未来を拓いた軌跡。

「“おおいた、つくりびと”になる」。

決意と希望を胸に地域とつながり、未来への一歩を踏み出した。

大分県全域が私たちの学びのフィールドに。

現地を訪れたからこそ見つけることができた景色。

地域に入り込んだからこそ真剣に考えられた課題。

地元の方々と同じく向き合うことで芽生えた心の交流。

そこには私たちと同じ“おおいた、つくりびと”がいた。

かけがえない出会いから生まれた絆。

同じ時を過ごしながら、流した汗。

語り合い、共に考えた、地域のビジョン。

幾つものストーリーは、未来をかたちづくる一つのかけら。

これからも、“おおいた、つくりびと”によって新しいページはつくられていく。

**INDEX**

- 04 p PROJECT01  
観光まちづくりプロジェクト  
八坂 龍汰郎
- 05 p PROJECT02  
楽らく広場「ひょうたん」  
河野 八重子
- 06 p PROJECT03  
マイクロ・エコ風車  
原田 敦史
- 07 p PROJECT04  
総合型地域スポーツ  
西村 史奈
- 08 p COC TALK01  
対談：COCとは、「地域創生」  
佐藤 樹一郎 / 菅 貞淑
- 09 p PROJECT05  
豊後大野プロジェクト  
小野 真輝
- 10 p PROJECT06  
木佐上コミュニティセンター  
幸野 幸人
- 11 p PROJECT07  
佐賀関「楽・楽マルシェ」  
石井 綾華
- 12 p COC TALK02  
対談：COCとは、「大学連携」  
越智 義道 / 吉村 充功
- 13 p PROJECT08  
「地域創生人材」育成講座  
橋本 堅次郎
- 14 p PROJECT09  
ふるさと体験村  
安部 正吾
- 15 p PROJECT10  
高齢者ものづくり体験  
下田 海宏
- 16 p COC TALK03  
対談：COCとは、「人間力」  
北見 靖直 / 高見 大介
- 17 p MEMBER'S TALK  
私たちが“おおいた、つくりびと”



八坂 龍汰郎  
経営経済学科

ゆっくり、じっくり、時に立ち止まることで、  
見過ごしていた風景があることに気づきました。

**PROJECT**  
**01**

学生ならではの視点で、  
豊後大野の魅力を再発見。

INTERVIEW

豊後大野市の観光資源を発掘し魅力を発信する。  
「原尻の滝」くらいしか知らなかった僕たちは、  
その答えを求めて、とにかく現地へと向かいました。  
電車に乗り、車窓を眺めていると、  
そこに広がっていたのは、まさに「ふるさと」と呼びたくなる、  
古きよき日本の風景。  
車を使わずに、ずっと歩き続けながら、  
目的地に着くまでに、いくつも寄り道をしました。

写真で見たことがある場所も、実際に目の当たりにすると  
その大きさや迫力、美しさに圧倒されました。

地元の人からも貴重な情報をいただきながら、  
僕たち学生の目線で見える、新たな宝物探しがスタート。  
SNSの投稿など、自分たちの世代らしい  
発信スタイルも取り入れました。

何もないのではなく、ただ見つけられずにいたのかもしれない。  
ここにはまだ、ガイドブックには載っていない  
魅力的なスポットがたくさんあるはずです。  
宝物探しは、まだ始まったばかりですが、  
これからも地域の方々と一緒に続けていきたいです。



## PROJECT 02

楽しく広場「ひょうたん」で、  
つながりのある地域づくり。

INTERVIEW

早いものでNBUの皆さんとは4年の付き合いになりました。最初はちいさな声で恥ずかしそうにしていたのに、今では笑顔満点の表情で冗談も言えるようになってきた。

その変化はおじいちゃん、おばあちゃんたちも同じ。毎回、会える日を楽しみにしていて、「病院に行かなくてもここへ来たい」と張り切ったり、「故郷を離れて大分に来ている学生もいるだろう」と、栗の甘露煮やお饅頭をつくってきた方もいらっしゃいました。

きっと、新しい居場所ができたのだと思います。家族以外の人と話すことは大切ですし、ましてや学生のような若い世代と交流できることはすごく刺激になるし、元気になれる。

いろんなレクリエーションも考えてくれて、本当に感謝しています。少くも上手いかななくても6割できれば大成功。失敗は必ずステップアップにつながります。彼らがいつの日か社会に出て、大人になった時、この場所を「もうひとつの実家」と感じてもらえるとうれしいですね。



「ただいま」と「おかえり」の関係へ。  
お互いに新しい居場所ができたのだと思います。

河野 八重子  
楽しく広場「ひょうたん」代表

## PROJECT 03

新しい風力発電装置により、  
わずかな風でも安定した電力を。

INTERVIEW

東日本大震災の際、停電になり街から灯りが消えました。電気を使うことが難しい状況や場所でも、誰もが電気を使えるようにしたいという想いが、わずかな風でも発電できるマイクロ・エコ風車の開発につながりました。

大分県で盛んな農業分野では、IoTを農業の助けになるような技術として組み合わせるスマート農業の取り組みが進んでいます。この風車を使えば、センサの電源となり、コンセントが無い畑や田んぼの真ん中でも環境や農作物の情報をモニタリングできます。小さな電力でも、さまざまな人に使ってもらうことができる無限の可能性を秘めているのです。

NBUでは教員と学生が志をひとつにマイクロ・エコ風車の研究・開発に取り組んでいます。そしてその実用化に向けて、地道な実験はこれからも続きます。

ものづくりにおいていちばん嬉しいことは、社会に役立つと実感できること。自分が携わった製品が地域の未来を支えることができればと思っています。これからも学生たちとこの喜びを一緒に味わえるようにマイクロ・エコ風車のチャレンジは続きます。



もしもの時に、誰かのために、新しい電力を。  
マイクロ・エコ風車ならきっと実現できる。

原田 敦史  
航空宇宙工学科 准教授



# PROJECT 04

大学がある大在地区に  
総合型地域スポーツの輪を。

INTERVIEW

私が大学3年生の時にスタートした総合型地域スポーツクラブ「OZAI元気クラブ」との連携活動は、今も続いているんですね。今、振り返ると悩んだり、迷ったりの連続だった気がします。「何を準備するの?」「どう動けばいいんだ?」って。最初の頃は仲間に頼み事をするのがとても苦手で、一人で1000枚のアンケートを集計したこともありました(笑)。

でも、ある時、たくさんの人と触れ合い、楽しんでもらうためには一人で全てをこなすことは無理だと気づいたんです。ほかの学生メンバーにお願いしたり、参加した子どもたちの保護者の方にも手伝っていただくことで心がひとつにつながった気がします。

子どもたちは、心が動かなければ、体も動いてくれない。動き方を具体的に話してあげたり、視線を合わせたり、自分たちなりに、考える時間が増えていきましたね。

今は教育関係の仕事をしています、大切にしているのは「伝える力」。まず伝える前に頭で考えて、相手の気持ちを考える。伝える力は、想像力と柔軟性から生まれるのだと思います。



考えて言葉にする、相手の気持ちを想像する。  
人の心を動かす、「伝える力」を大切にしたい。

西村 史奈

株式会社 エフェクトプラン  
(経営経済学科 2016年度卒業)



COCとは、「地域創生」

## 地域で学び、身につける、 「自ら一步を踏み出す力」

大分市長 佐藤 樹一郎 × 日本文理大学 学長 菅 貞淑

「市民主体のまちづくり」を進める佐藤 樹一郎市長と「地域のための大学づくり」に取り組む菅 貞淑学長が、未来に羽ばたく人材、地域創生のビジョンを語り合う。

地域の課題と向き合う、  
大分全域が学びのステージ。

佐藤 以前、「ふれあい市長室」でNBUにお伺いした時に、木佐上コミュニティセンターで行われたIT講習会や中判田駅を中心とした新しいまちづくりプランを学生から直接聞くことができました。NBUの学生たちは実際に地域に入って自分の足で歩いて、いろんな人から話を聞いて、課題

を整理する。そして考えをまとめて提言をするということをトータルで行なっている。総合的なコミュニケーション能力の高さを感じますね。  
菅 ありがとうございます。地域での学びは、実践と反省を繰り返しながら進みますので、学生は自分で考える、自分の言葉で表現できるようになります。そして、自信を付けることで、次のステップにいく勇気が生まれます。大分全域をひとつのキャンパス

として捉え、さまざまな地域に出向き、活動することで机上やウェブサイトの中だけでは分からないことを肌で感じられますし、学生は自分自身の成長を実感することができます。だからこそ、私たちは、本人が成長の手応えを感じられるプログラムを考え、継続的に取り組むことができる仕掛けづくりが大切だと思っています。  
佐藤 地域住民にとっても若い学生さんがメンバーに入ってくれること

「ひとをつないで、まちを元気に、  
育てよう“おおいた、つくりびと”。」



で、大いに刺激になり、会議そのものが活性化してきます。市内13地域において、各地域の代表者などで構成する「地域まちづくりビジョン会議」の大在・坂ノ市地区の会議メンバーにはNBUの先生や学生も参画されています。大分市としても、学生の皆さんが地域の人たちと一緒に活動をしていただくことはありがたいですし、一緒にプログラムを考えていく中で互いに成長するのは素晴らしいことです。

産学官が連携を図りながら、  
一人ひとりの人間力を育成。

菅 COCの活動を通じて実感したのは「連携」の重要性です。地方創生や地元就職の促進を考える上でも産学官連携は不可欠。行政、企業の皆さんとしっかりと連携を図りながら、学生一人ひとりの人間力を育てていきたいと考えています。大分を元気にする、やる気のある優秀な人材を輩出したいという想いから、私たちは、COC事業を通じて地域で活躍できる人材を“おおいた、つくりびと”と

名付け、活動を続けてきました。その結果、県内大学における県内就職率(32.2%)と比較してもNBUの県内就職率(41.7%)は高くなっています。県外からNBUにやってきた学生がCOCの活動を通じて大分の「場所」や「人」を好きになり、そのまま大分に定住、就職するケースも生まれてきました。  
佐藤 それは嬉しいことですね。若者は新しいアイデアや技術を生み出す可能性を秘めています、そんな若い力が地域によっては足りなくなっています。大分市では、今年度「大分のつくり企業ガイドブック」を作成しました。専門性が高く、未来へチャレンジしている大分の企業の魅力をしっかり学生に伝えることができれば「自分がやりたいことができる会社」だと感じてもらえるかもしれない。そこから企業と学生、双方にとって理想的なマッチングが実現すると思います。またNBUと大分市のつながりのひとつとして、大分市産業活性化プラザにおいて人材の育成確保、定着を高める講座をお願いしています。今、「リカレント教育」が注目を集めています、社会人になった後に、学び直したい、新しいことにチャレンジしたいという市民も増えているようです。  
菅 教育機関として地方創生に関わる時、即効性を求めるのではなく、じっくり時間をかけてやっていきたいと考えています。そこで一番重要なことは「やる気」なんです。自分自身が



やりたいことに対して、しっかり考えて計画を立てて実践する。当然、一人で全てはできないから、他者とコミュニケーションを図ることも必要です。殻に閉じこもるのではなく、自ら一步を踏み出す力は世界のどこでも通用すると思います。それを身につけるステージが大分であり、一生懸命に取り組むことが地方創生につながると信じています。少くく失敗してもいいから、学生には伸び伸びとチャレンジして欲しいですね。  
佐藤 大分市は今、さまざまな社会実験にトライしながら課題を解決するための一步を踏み出しています。例えば自動運転が実現すれば、交通弱者の問題、人材不足問題の解消になりますし、市内の魅力的なスポットをつなぐ周遊観光の新しい形が生まれるかもしれません。NBUにはCOC事業を通じて、地域振興、活性化の種を蒔いていただきたいと思いますので、それが大きく花開くことを期待しています。大分市の新しいチャレンジにも一緒に参加いただき、お互いにシンポジウムや発表会などを通じてネットワークを強化していきたいでしょう。



# PROJECT 05

汗を流し、土にまみれる。  
広大な大地が学びのステージ。

INTERVIEW

僕は地元が豊後大野市で、おじいちゃんが米作りをしています。でも、正直に言うと、農業に関心は持っていませんでした。

プロジェクトの活動で、ご当地ブランドのさつま芋「甘太くん」を初めて収穫した時、中腰のまま黙々と行う作業や、土の付いた芋をコンテナに入れるしんどさは想像以上でした。高齢化が進む農家では人手も少なくなってきました。自分たちが今、できることは何だろうと、悩んだり、落ち込んだりすることもありました。

大分県の名産である椎茸を使って、地元の子どもたちと色々な料理にチャレンジもしました。「こんなに簡単に作れる!」、「お肉みたいにジューシー」と押し寿司やステーキの美味しさに感動! それからはすっかり椎茸ファンになり、食卓に並ぶ回数が増えました。

寒い日や雨がが続くと農作物は大丈夫かなと心配になります。現場でのさまざまな体験を通じて、これまで遠い存在だった農業も「自分ごと」になりました。これからも地元の生産者と一緒に汗を流していきたいです。



大地と人の心に触れたからこそ本気で考えた、  
これからの農業を支えるために必要なこと。

小野 真輝  
情報メディア学科

# PROJECT 06

閉校した小学校跡地を  
地域の学び場へ。

INTERVIEW

小学校が閉校になり、朝のチャイムが聞こえなくなった。私は木佐上で生まれ育ったので、寂しかったですよ。でも、小学校の跡地を活用した新しいコミュニティづくりがNBUと地域住民で始まり、何かが変わり始めました。

スマホやパソコンの教室では学生たちが私たちの先生。みんな「孫とメールができるようになった」と喜んでますよ。歳を重ねても、学びたい、知りたいんです。

校庭にドローンが飛んだり、水中ロボットが滝に潜ったりすると、「昔はここで遊んでいた」、「こんな魚がいるんだ」と、子どもも大人もワクワク、ワイワイ。地域が元気を取り戻していくのがわかります。

新しい技術、今までにない視点で、アイデアをカタチにしてくれる。そんな信念を持った学生は、とても頼もしいですよ。

今後は木佐上が抱えるイノシシの被害や洪水対策などの課題をぜひ、学生と一緒に取り組んでいきたいですね。人をつなぐ、人の役に立つ。それはものづくりの原点ではないでしょうか。



若者の新しい視点やものづくりの情熱に触れ、  
生まれ変わっていける場所になりました。

幸野 幸人  
木佐上連合区長



# PROJECT 07

少子高齢化の進む佐賀関地区に  
新しい風を吹き込む。

INTERVIEW

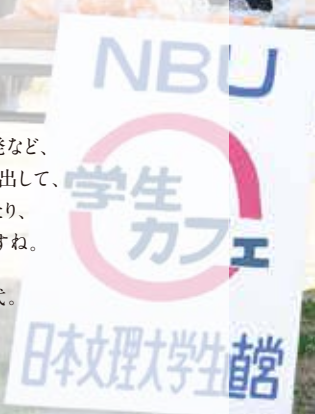
高校時代から簿記と会計の勉強が好きだったので、大学でも会計ファイナンスコースを選択しました。月に一度開かれる、佐賀関「楽・楽マルシェ」は、地元の人たちと話をしたり交流できるので私にとって、かけがえのない時間です。

人見知りでも声も小さいので、最初は戸惑うこともありましたが、お客さんの方から優しく話しかけてくれるので、モノを販売するだけでなく、何気ない会話の中にある大切な想い気づくことができました。

皆さんに恩返し気持を込めて、いつの日か自分たちの手で商品開発をしたいと思っています。

佐賀関産のはっさくを使ったジュースの開発など、加工はもちろん、商品ラベルなどもアイデアを出して、試飲会で感想を聞いたり、広告なども作ったり、企業とのコラボレーションも実現させたいですね。

野菜もお米もインターネットで購入できる時代。だからこそ人と人が向き合い、つながることを大切にしていきたいと思っています。



## 地域交流を通じて生まれた大きな夢、 いつの日か佐賀関産の商品を届けたい。

石井 綾華  
経営経済学科



COCとは、「大学連携」

## 大学連携によって生み出される、 新たな地方創生、地域活性化のカタチ

大分大学 COC+推進機構長  
越智 義道

日本文理大学 教育推進センター長  
吉村 充功

県内のさまざまな大学が参加するCOC+は、地域や地元企業とつながりながらその可能性を広げている。COC+の成果や今後の課題について大学の垣根を超えて熱い議論が交わされた。

地域と共にオール大分で  
若者が育つ環境づくりを。

越智 今、大学もグローバル化の時代が訪れています。大学で専門分野の知識を習得するだけでなく、社会全体や企業活動との関わりの中で、他分野のノウハウだったり、考え方をフィードバックしたり結合することが重要になってきます。その中で研究の

ベースとなるモチベーションがどこにあるのかを考えたり、知ることが大切。その意味においてCOC+の果たす役割は大きいと考えます。吉村 NBUは建学の精神に「産学一致」を掲げ、産業界との関わりを大いにした実学教育を重んじています。今や大学は、さまざまなステークホルダーの方々や協働し、連携しながらイノベーションしていく時代。学生も専

門性を高めるだけでは、変化の激しいグローバル社会の中では太刀打ちできません。全ての学びを大学の中で完結させるのではなく、地域の方や企業人にも育ててもらおう。そんな環境が必要だと実感したことが、本学がCOCに取り組みきっかけでした。越智 NBUが、COC活動を展開し、プロジェクトを実践している動きを正直羨ましいという思いで見していま

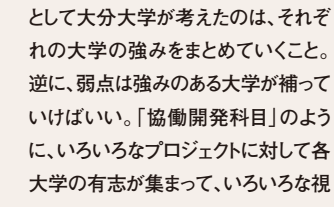
## それぞれの大学の強みを生かし、 連携から新しい何かを生み出す。



た。地域の現場に行くことで課題を見つけ、解決策を考える。そういったCOCの活動は学生自身の成長につながりますから。

吉村 COC活動を進めることで大学と地域との関わりが生まれました。地域の方にとっても地域の課題を学生と一緒に解決するスタイルがあることを知るきっかけができました。正直に言いますと、NBUがCOCの活動をスタートさせた1年後にCOC+が大分県内の大学全体で始まることになり躊躇うこともありましたが、よく考えてみると、各大学が単独でやるCOC活動はそれぞれ

の特色を発揮して行えばいい。COC+は大学同士の連携から何かを生み出すことが大切なのだ気づきました。例えば、NBUの学生が大分大学の学生たちと一緒にやるからこそ自分の大学では見えなかったこと、考え方を知ることができる。それが成長につながるのであれば「協働開発科目」のような連携を実感できるプログラムがCOC+には必要だと思えてきました。越智 県内の大学が一丸となってCOC+に取り組むにあたって、統括役



として大分大学が考えたのは、それぞれの大学の強みをまとめていくこと。逆に、弱点は強みのある大学が補って

いけばいい。「協働開発科目」のように、いろいろなプロジェクトに対して各大学の有志が集まって、いろいろな視点で問題解決を図ることを今後はもっと活性化していきたいですね。越智 地域の方々を抱える課題と一緒に解決していく際にも、さまざまな大学が介入することで課題解決の選択肢がさらに広がるのも良い点ですね。それが地方創生、地域活性化にもつながるでしょう。しかし、ただ地域に貢献し続けるのでは意味がありません。若い力が入ったことをきっかけに、地域やそこで暮らす人が元気に活動していく。そんな循環をつくりたいですね。越智 まさにその通りです。若い人が来てくれたらいいというスタンスではうまくいきません。地域は地域で自立していく、その助走段階で学生の力を借りる、将来構想を学生と一緒に考えるということが大切ですね。

越智 COC+が大学間の連携だけでなく、多くの自治体や企業を巻き込み始めています。大分での雇用促進の原動力になりつつあるなど。これを強みに「大分で学ぶこと、大分での就職はとても豊かな人生を送ることができる」というモデルを発信していきたいとも思っています。最終的には大分の魅力を県外に発信するところまで発展させていきたいですね。越智 人生100年時代と言われる中で、学生があと80年間もの間、大学で学んだことだけで長く働き続けるのは難しい。企業がほしい人材だけでなく、これからの日本に必要な人材を育成していくことも重要です。今の学生たちは困難にぶつかった時に諦めてしまうことが多く多い気がします。困難を乗り越えたからこそ身につくものってあると思うんですよ。失敗体験を含め「何かを達成した、ここまでやり遂げた」という経験があると、乗り越えられるかもしれません。COCやCOC+の活動を通じて、そういうマインドを身につけてほしいですね。

自らが課題を見つけて解決する  
そのプロセスを経験してほしい。

越智 海外に留学した学生が、現地の人から自分の生まれ育った場所、自分が住んでいる地域について聞かれたときに、何も答えられずに困ったという話をよく聞きます。COCやCOC+の活動によって地域と深く関



# PROJECT 08

ストックした「知」を  
地域社会のために還元したい。

INTERVIEW

今、大学の大きな役割のひとつとして、地域社会貢献があります。NBUが大分に存在する中でストックした「知」を、「地域創生人材」育成講座を通して学生だけでなく、地域の皆さんに還元していくことが使命です。

「学びたい」という気持ちには学歴も年齢も関係ない。意欲×能力で、人はどこまでも成長できると信じています。私自身、社会に出て40年以上が経ちますが、バブル崩壊やリーマンショックなど、いろんな逆風を経験しました。厳しい時代を乗り越えた人たちは皆、学び続ける人たちなんです。コツコツと自分のキャリアを積んできた人たちが生き残っている気がします。

誰の人生にも、過去と現在と未来があります。現在は過去の結果であり、未来は現在の結果なんです。だとすれば、出来ることは「現在」を大切に生きること。

未来を担う若者のための明日を、大人がしっかりつくりましょう。地域社会の輝きは、世代継承によって生まれます。よく学生にも言うんですよ、「30年たって活躍してる君たちに会うのが楽しみにしてるよ」って(笑)。



「学びたい」という気持ちに学歴も年齢も関係ない。  
意欲ある人はどこまでも成長できると信じています。

橋本 堅次郎  
日本文理大学 副学長

# PROJECT 09

少子高齢化が進む小規模集落の  
シンボルを蘇らせよう。

INTERVIEW

公共工事にとって大切なことは地域住民の皆さんに計画や意義をご理解いただくこと。「こういうものをつくります」と、初対面の方々に直接、説明に伺います。

その時、思い出すのが学生時代に参加した「豊後大野ふるさと体験村」でのプロジェクト活動。老朽化が進む地域のシンボル施設を蘇らせるためにそこで暮らす人の「想い」や「願い」をたくさん聞き歩きました。

そこで学んだのは、自分の考えをわかりやすく伝えること。そして、一方通行ではなく、相手の話をしっかり聞くこと。地域のことは地域の皆さんがいちばんよく知っていますし、愛情や思い入れも深い。

真夏の太陽が照りつけても、北風が吹きささんでも同じ現場はないので、仕事は楽しいですよ。その場所に行かないと、分からないことがある。学生時代も今も、そう感じています。

教科書や専門書に載っていないことに現場で出会う。体験を自分の学びへとつなげて成長していく。そのスタイルが大学4年間で自然と身につけていました。



安部 正吾  
大分県庁  
(建築学科 2016年度卒業)

その場所で体験したことを学びにつなげる。  
学生時代も今も、それが自分の成長スタイル。



# PROJECT 10

ものづくり教材を活用して、  
高齢者のコミュニケーションを促進。

INTERVIEW

高齢者の皆さんが自分自身で電子オルゴールや電子サイコロをつくることで脳が刺激され、いきいきしてくるのが分かります。でも、配線図通りに小さな基盤にピンを刺すのは細やかな作業。視力や指先の動きが低下されている方も多く、当初は不安でした。

おじいちゃん、おばあちゃん、一人ひとりに学生が付いて、作業をサポートするもの、やはりなかなか上手くできない。「配線図のピンを色分けしよう」、「押し込み力が弱いのかも」どうやったらスムーズに作業が進むのかを真剣に考えました。

その時、ヒントになったのは、皆さんの手の動きや表情です。そばにいるからこそ、分かることがたくさんありました。現場で感じたことを持ち帰り、改善することができたのです。

今では、あっという間に配線が完成するようになりました。作業に余裕が出てくるので、会話を楽しむ時間も増えました。

手のひらに収まるような小さな電子オルゴールを「いつも使っちゃんで」と見せていただいた時、なんだか、とっても嬉しかったです。



## 単なる作業ではなく、本当に届けたいのは、 生きがいにつながる「ものづくり」の楽しさ。

下田 海宏  
情報メディア学科



COCとは、「人間力」

## 地域を元気にする「人間力」。 若者のエネルギーを届けよう。

国立阿蘇青少年交流の家 次長 北見 靖直 × 日本文理大学 人間力育成センター長 高見 大介

地域とつながること、地域のために学生ができることは？  
ボランティアや地域貢献の「現場」を知る二人が本音で語り合う。

生き様に触れることで、  
何かが変わり始める。

**高見** あるときから学生が地域や社会と離れていった気がします。システムチックに学び、キャリアを得るためには道草をせずに、もっと合理的に歩いていきたいと。

**北見** 学生が「地域」という言葉に具体的なイメージが湧かないという感

じです。これから本当に大事なのは地域とコミュニティなのに…。これが分からなければビジネスも地域貢献もできません。若者が地域コミュニティの実感を味わっていない。地域社会も若者という大事な存在を忘れていく状態になっていますね。

**高見** 地域によって抱えている問題

や課題はそれぞれ違います。そこに学生が出向くときに最初にお伝えするのは、「学生は手がかかりますし、多分仕事が3つ4つ増えると思います」ということ。

**北見** それでいいんですよ。学生はお助けマンではないですが、彼らを持っている力があるのです。それは労働力ではなくて地域を元気にする「人間力」。若者が成長するというこ

「おろそかに生きない人、  
何となく生きない人になってほしい。」



とにおいて、そばにいる大人はとても大切な存在です。若者は変化と成長していることをそばにいる大人から言われて気付くことも多いですから。

**高見** 日田で水害が起きたときに、1週間に2回も水害に遭った地域にボランティアに向かいました。地域全体が途方に暮れていましたね。高齢化が進む商店街の人たちは「もう商売を辞めてしまおうか」と。お惣菜屋のおばちゃんも「被害も大きいし、もう、あまり儲からない」と弱気になっていました。すると、学生が一生懸命「おばちゃん、そんなこと言わずに」と励まし始めた。まだ未熟な存在である若者たちの純粋無垢な言葉と行動にいつしか彼女も「うちの唐揚げは天下第一品だから、今度、食べてね」と元気を取り戻している。生き様という数値化できないもの、でも何か心が温かくなったり、グッとわしづかみにされたような、ほんやりとした温かいものに触れて、「こういうことがあるのか」と心動かされました。

**北見** 地域における後継者不足は深刻ですが、それだけではなく、仕事に対する誇りというものも少しずつ消えてしまっている気がするのでは

す。今まで何十年もやってきた自分たちは正しかったのだろうかという葛藤の中で、「私はこの仕事をやってきた」、「この唐揚げに魂を込めている」というようなことを言語化できる対象として若者がいるのではないかと思います。そこで若者はおばちゃん生き様に触れ、自分の中の何かが変わり始めます。

**北見** 地域における後継者不足は深刻ですが、それだけではなく、仕事に対する誇りというものも少しずつ消えてしまっている気がするのでは



**北見** どんなプロジェクトでも初めから終わりまでひとりの人間として、取っ組み合う丸ごと感があるかどうかです。そこで大切なのは自分自身で、過去と現在をつなぐこと。例えば、森林保護活動で森に入るとします。林業家が「昔は一升瓶に水を入れて朝4時から作業をしていた」、「軍手もない時代に蜂が襲ってきて…」そんな苦労話を聞くことで、きつと森を見る目が違ってくるはず。この地域で今、自分たちは何ができるのかを本気で考え始めるわけです。過去なしに未来はありえない。地域の物語を知ること

で「地域で頑張ろう」と思える。また次の物語を紡ぐために…。

**高見** ある方が「WHY?」に答えるのはSTORYだけだ」と。地域や社会が抱える問題には、WHY?＝なぜ?と感ずるところがたくさんあります。そこで「どのようにしたらいいですか」とHOW TOばかりを探すのではなく、地域の歴史や人とのつながりの「物語」を見つけていることができる。そんなWHY?の答えを考えられる人間力を学生たちに身につけてもらうために、COC活動の学びと経験を今後、さらに発展させていきたいと思っています。



# MEMBER'S TALK

各プロジェクトに関わった“おおいた、つくりびと”が、活動を通じて感じたこと、大分の未来について語ります。



地域での活動では、地域の方々の話を聞いて、自分たちの考えを伝えることが求められます。そういったコミュニケーションを通じて、お年寄りの方々に顔や名前を覚えてもらいました。活動のときにはお菓子やお漬物までいただいたりと、地域の温かさに触れることができました。

安達 望美 建築学科



自分自身の出身地である豊後大野市をフィールドに活動しましたが、新しい魅力もたくさん発見できました。この大分の良さを発信して、さらに大分を盛り上げていきたいと思っています。

高橋 和也 経営経済学科



活動を通じて、地域の方々から元気をいただき、自分たちも頑張らなきゃと思いました。若者もお年寄りも一緒になって、話し合ったり助け合ったり、活気あるまちにしたいと思っています。

山下 涼介 情報メディア学科



地域活動で身につけたのは講義だけで学べない技術。地域課題を解決するために、日頃は使用しない情報機器のことも積極的に勉強し、自分のできることが増えました。また、どこに課題があって、何が目的なのか考えて行動できるようになりました。

高橋 瑞希 情報メディア学科



日常、なかなか高齢者の方と関わる機会は持ってません。ただ、たくさんの経験ができる学生だからこそ、いろいろな方々と関わり、お互いが元気になる良い関係を構築できればと思います。

大田尾 英治 経営経済学科

大学生の皆さんは、地域のお年寄りや私たち子どもの距離を埋める大事な存在。お兄さんやお姉さんのおかげで楽しく取り組みました。自分より小さい子どもたちが同じように楽しく参加できるように、私も優しいお姉さんを目指して、活動を続けていきます。

浜田 望乃香 佐賀関中学校



先輩方から受け継いだ、自然豊かな大分での「里山保全活動」。地域の方々の憩いの場にするという目標に、ずいぶん近づいてきたと思います。活動は後輩たちに引き継ぎましたが、ぜひゴールが見たいですね。また、後輩たちのお手伝いに行きたいと思っています。

坂本 祐輔 航空宇宙工学科

人間力育成センターでは、さまざまな地域をフィールドに学生が活動していますが、将来、一人でも二人でも「地域の活性化に携わり続けたい」という学生が増えるといいなと思います。そのためには、引き続き、学生のサポートに取り組んでいきたいと思っています。

山下 圭亮 人間力育成センター



今学んでいることを活用して、若者同士や自治体、企業など、たくさんの人が連携して、大分が盛り上がる仕掛けづくりができるといいなと思っています。

成松 裕子 経営経済学科



週1回、歩いて寄れる地域での交流の場があるのは大変良いことだと思います。一旦、外に出ても「ふるさとっていいな」と戻って来てもらえる地域にしたいです。

麻生 千佳 豊後大野市

子どもたちやお年寄りや接するうちに、自分のためだけでなく、人のために何ができるかを考えるようになりました。自分の得意分野である「ものづくり」を通じて、今後も地域に貢献していきたいです。

鶴野 瑞穂 機械電気工学科



学生の役割は、地域活動の自立をサポートすることだと思っています。学生たちは地域に出て、たくさんの方を学び、成長していきます。地域の方々も学生と一緒に「地域コミュニティ拠点」で活動することを通して、さらにつながりが広がっていると感じています。

坂口 昌宏 経営経済学科 准教授

地域プロジェクトで学生が変わるのか半信半疑でスタートしましたが、活動を通して目に見えて学生が積極的に課題に取り組むようになりました。卒業研究でも「地域」を意識したものが多くなり、課題意識がずいぶん変わったと実感しています。

池畑 義人 建築学科 教授



地域住民自身が「こんなまちにしたい」と考え、「まちづくり」を進めるとともに、ひとの温かみを感じられるまちにしたいです。そのためにも、学生の活動が地域の方々の居場所づくりにつながるよう、さらに連携を深めていきたいと思っています。

山田 悠二 NPO法人 彩々カフェ 代表

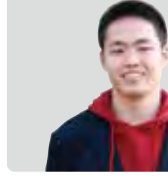


大学のキャンパスだけでは学べない、地域に出て活動するからこそ生まれる課題がそこにはありました。その課題解決に向けて自分たちで行動することを学ぶ良い経験になりました。

先崎 聖恒 建築学科

大分の良いところをもっとアピールして、県外の方々に足を運んでもらうことで大分の魅力を再発見し、さらに元気な大分にしたいです。学生時代にたくさんの方を経験して、目的を持って頑張っている環境づくりができるいいなと思います。

佐藤 充 大分県信用組合



「学生の行動力」と「お年寄りの知恵と経験」を融合させることで、「子どもたちの地域での学び」につながっている気がします。将来は子どもたちに自然体験をさせてあげられる教員を目指します。

小松 雄斗 情報メディア学科



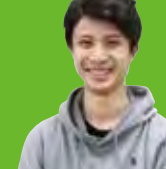
大分にはまだまだ気づいていない観光資源がたくさんあると感じました。さまざまな角度や視点で、もっと大分のことを知り、私たち若者や外国人の方々も楽しめる大分になるといいなと思います。

間 結夏 機械電気工学科



プロジェクトに参加するのは本当に楽しい。大学生以外とのコミュニケーションは日頃気づかないことを気づかせてくれる貴重な経験です。活動に参加しないもったいないです。

南 佳子 経営経済学科



専門教育だけでは学べないことを、地域活動で身につけることができた気がします。卒業後は故郷の沖縄に帰り、空港で働く予定ですが、文化や伝統を守り、そして子どもたちに引き継いでいく活動を続けていこうと思います。

與儀 友紀 航空宇宙工学科

学生たちが「なぜここ？」と思ってスタートした活動で、見えてきたのは自分の住む地域の良さ。どこをフィールドにしても、気づいていなかった魅力を再発見するきっかけになっています。さらに自分の地元と比較してそれぞれの良さをはっきり言えるようになりました。

今西 衛 経営経済学科 准教授



産学官民医のさまざまなセクターに関わるメンバーで構成されたグループで、それぞれが「超高齢化社会に潜む問題」に向き合えたことはとても価値のあることだと感じました。

松本 康史 大分県立芸術文化短期大学 准教授



大里 一矢 情報メディア学科



各地域では独自のコミュニティが存在し、お祭りやイベントもさまざま。次のステップは各地域の特色を活かして、市全体を盛り上げていきたいと思っています。

鈴木 統希矢 経営経済学科



活動では、地域の人の「地元愛」に触れることができました。農家の方が自ら「まちおこし」に取り組んでいる姿を見て、自分も地元と一緒に盛り上げていきたいと思いました。

谷川 由希 経営経済学科



いろいろお話をしながら、気配りすることが大事だと気づきました。参加者の皆さんは高齢ですが、すごく元気です。いろいろなことに気づききっかけになるので世代間交流はすごく大事だと思いました。

若林 優美伽 経営経済学科



プロジェクトを通して、「人に質問すること」「自分の意見をしっかり伝えること」ができるようになりました。仲間と議論できるようになったことが私の大きな成長です。

堀江 紗綾 航空宇宙工学科

ものづくりから地域を作り、そして暮らしを作ることができると考えています。活動を通して、あらゆる人同士の結びつきが強くなり、人に優しい大分県になればいいなと思います。

森 淳一 大分リハビリテーション病院





若者の力で地域とつながる、ひとをつなぐ。

---



これからも、私たちは“おおいた、つくりびと”でありつづける。